ISSN 1883-8936

Mtzw ニュース

ITAMISHI KONCHUKAN NEWS

第15号 2010/7

特集 昆虫館の学芸スタッフ図鑑

伊丹市昆虫館

ほっとパーク昆陽池

昆陽池公園のチョウ　その1　アゲハチョウ科

昆陽池公園の昆虫シリーズ第５弾はチョウ類です。近年では、43 種類のチョウの記録があります。その中で今回は、多くの人に親しまれているアゲハチョウ科をとりあげます。昆陽池公園ではここで紹介する８種が生息しています。よく見られるのは「ふるさとの小径」のある公園北側の林とその周辺です。（坂本昇、角正美雪）

■ジャコウアゲハ
Byasa alcinous

クロアゲハよりひとまわり小さく、よわよわしく飛ぶ黒いアゲハです。市内では見られる場所が限られますが、昆陽池公園では、昆虫館のまわりに幼虫が食べるウマノスズクサを植えはじめた 2000 年頃から、このチョウが見られるようになりました。

ジャコウアゲハ（メス）

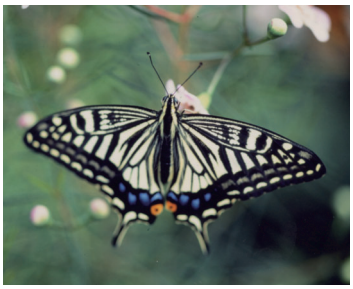
■アオスジアゲハ
Graphium sarpedon

伊丹市の木であり、街なかにたくさんある「クスノキ」の葉を幼虫がエサにするためか、市内のあちこちで見られます。とてもすばやく飛び、虫採り網を持った少年たちにもなかなか捕まりません。伊丹市昆虫館のロゴマークもこのチョウです。

アオスジアゲハ

■ナミアゲハ（アゲハ）
Papilio xuthus

最もよく見られるアゲハチョウ。「ナミ」は「並」のことです。バタフライガーデン事業のデータによると、伊丹では春から秋口まで年に４回以上発生しているようです。昆陽池公園全域で見られます。


ナミアゲハ

■キアゲハ *Papilio machaon*

草原のチョウです。ナミアゲハに似ていますが、黒く塗りつぶされた前ばねのつけ根で見分けます。昆陽池公園ではあまり多くありません。

キアゲハ

■ナガサキアゲハ *Papilio memnon*

大型のアゲハチョウ。なかでもメスの大きさは日本のチョウで最大級です。オスとメスで模様が大きくちがいます。黒いのでクロアゲハとまちがえられますが、後ろばねの突起がないこと、はねのうら側のつけ根の赤い模様などで見分けます。もともと南の地域に生息する種類で、年々北方に分布域を拡げていると言われています。

ナガサキアゲハ（オス）

ナガサキアゲハ（メス）

■モンキアゲハ　*Papilio helenus*

クロアゲハと同じくらいの大型のアゲハチョウ。雑木林や山地でよく見られる種類で、昆陽池公園ではまれです。近年昆虫館周辺でちらほらと見られるようになりました。

モンキアゲハ

■クロアゲハ　*Papilio protenor*

大型の黒いアゲハチョウ。ナガサキアゲハと同じく、ふるさとの小径をよく行ったり来たりするのがよく見られます。

クロアゲハ

■カラスアゲハ
Papilio dehaanii

青緑色に輝く美しいはねを持つアゲハチョウです。昆虫館の裏にあるキハダの木でまれに幼虫が見つかります。

カラスアゲハの５齢幼虫

むしムシ虫眼鏡

Vol.15 いい声（？）で鳴くゴキブリ！？

マダガスカルオオゴキブリ成虫（オス）

＜マダガスカルオオゴキブリ＞
学名：*Gromphadorhina* sp.
分類：ゴキブリ目オオゴキブリ科
体長：約 70mm
分布：マダガスカル島

皆さんはアフリカ大陸の東側に浮かぶマダガスカル島をご存じでしょうか？面積が日本の 1.6 倍（本州だけだと 2.6 倍）もある巨大な島で、貴重な動植物の宝庫として知られています。マダガスカルオオゴキブリは、この島に生息する大型のゴキブリで、黒色（頭部・胸部）と褐色（腹部）のツートンカラーが特徴です。同じゴキブリでも、嫌われ者のクロゴキブリやチャバネゴキブリとはすいぶん違います。動きがおっとりとしていて、はねも退化しているため、飛んで逃げることもありません。飼育もとても簡単なため、ペット昆虫として世界中で飼われているゴキブリなのです。そしてなんとゴキブリなのに鳴くんです。指でつついたりして驚かすと、オスもメスも「シュー、シュー」という鳴き声を出して威嚇（いかく）してきますが、まったく恐くありません。昆虫館では昨冬開催した企画展「ごきぶり」で、様々な種類のゴキブリの生態展示に挑戦しました。中でもマダガスカルオオゴキブリはナンバー１の人気で存在感も抜群だったため、ごきぶり展終了後も１階の生態展示室で好評展示中です（2010 年７月現在、）。この魅力的なゴキブリの姿を見たら、あなたもゴキブリ好きになってしまうかもしれません。ぜひ昆虫館に見に来てください！（奥山清市）

亜熱帯の温室から

Vol.15 ナゴラン

ナゴランは沖縄島など日本の南西部に分布し、樹木の幹や枝に太い根をはりつかせて生活する着生ランの仲間です。残念ながら野生の株はめったにみられず、環境省が公表するレッドリスト（2007）では絶滅危惧 IB 類（近い将来における絶滅の危険性が高い種）に指定されている貴重な植物です。昆虫館では今年、園芸栽培されている 10 株ほどを沖縄より導入し、４月上旬から展示しました。チョウ温室には枯れたヘゴ（巨大なシダ植物）の丸太に水苔ではりつけて登場させました。花は小さく可憐で、10 数ｃｍほどの花茎に数個つくだけですが、大型のカトレアに負けないほど強く上品な芳香をもちます。温室の中だけでなく、学習室の机の上にも素焼き鉢に植えた株を置いたところ、周囲に素敵な香りの空間を作り出してくれました。今は開花期が終わり、葉っぱだけになっていますが、着生ランの命である根が伸び、ヘゴの丸太にしっかりとはりつきはじめました。このままうまくいけば来年の４月ごろにはまたお花が咲くことでしょう。またあの香りに出会える日が楽しみです。（長島聖大）

チョウ温室に登場したナゴランの開花株

学習室でも香りをふりまいてくれました

＜ナゴラン＞
学名：*Sedirea japonica*
分類：ラン科

特集【昆虫館の学芸

伊丹市昆虫館は今年で２０周年を迎えます。昆虫館の顔は、もちろんたくさんの
たのが飼育、展示、収集、調査、などの専門職員である私たち「学芸スタッフ」

野へ山へとがんばってます

伊丹市昆虫館には、館長を含め６名の学芸スタッフがいます。みな、脂がのった個性派ぞろい。いつも表に出てくるわけではありませんが、それぞれが飼育や栽培といった昆虫館の根幹を支える業務を担当しながら、得意分野を活かして事務から展示企画、調査研究、様々な交流活動へと走りまわっています。

館長
後北峰之（うしろきたみねゆき）

【原産地】兵庫県尼崎市
【好物】ナナフシ類、野生のカイコ類、ミツバチ類、スズメバチ類
【天敵】5mm 以下の小さな虫（老眼の厳しい現実）
【職歴】1985 年から 1995 年まで㈶伊丹市公園緑化協会、1998 年から再度伊丹市昆虫館へ、2010 年から館長
【主な担当】チョウ温室（植物）、ヤママユ飼育講座、ミツバチ観察会
【最終学歴】島根大学大学院農学研究科修了
【専門分野】昆虫生態学

小学校中学年から父の実家である宝塚市西谷の田舎で、夏休みはカブトムシ、クワガタムシの採集三昧。思いかえせば、虫捕りは穏やかな時間を過ごすための現実逃避の場所でした。現職のルーツは月並みですが小学校 5 年生の頃に読んだファーブル昆虫記。昆虫館ではニホンミツバチの学習教材化、スズメバチ類の一群標本の作製と収集、オオキンカメムシの移動経路の解明などに取り組んでいます。都市の中の昆虫館という特徴を生かして、バタフライガーデンの普及などにも力を注いでいます。

主任学芸員 (主査)
奥山 清市（おくやませいいち）

【原産地】山形県西村山郡河北町（なんと郵便番号が 999-3531）
【好物】こや池カスター、アカハネナガウンカなど赤い虫
【天敵】シロモンオオサシガメ（昔吸われて丸2日痛かった）
【主な担当】陸水生昆虫の生態展示、写真
【最終学歴】北海道大学大学院農学研究科修了
【専門分野】昆虫生態学

田舎で自然に囲まれて育ったもので、子どもの頃から昆虫は良い遊び相手でした。この頃の楽しかった虫との記憶が、宇都宮大学農学部と北海道大学大学院で昆虫学を専攻するきっかけになったのは間違いありません。大学の掲示板の隅っこにあった一枚の職員募集のお知らせとの運命的な出会いが、僕と伊丹市昆虫館とを結びつけてくれました。担当した展示で特に思い入れが深いのは、三部作のストーリーをつくるのが大変だった「いたこん☆カーニバル」、絵本にもなった「虫のあかちゃん」など。最近では、昨年の特別展「むしの忍者大集合」等を担当しました。ここ数年は昆虫写真（特に白バック）に凝っているので、展示やグッズ制作にどんどん活用していきたいと思っています！

主任学芸員（主査）
坂本　昇（さかもとのぼる）

【原産地】大阪府枚方市
【好物】はちの子ご飯、ハスの花
【天敵】アシダカグモ
【主な担当】チョウ飼育、蔵書管理
【最終学歴】大阪教育大学大学院教育学研究科中途退学
【専門分野】博物館学

小学生時代は毎日雑木林に通う虫採り大好き少年でしたが、中学から大学まではすっかり昆虫から離れていました。震災後の再オープン時に採用されてもう 14 年。教育学部出身ということで展示や教育系の活動をがんばっています。体験型の特別展「ワクワクくぬぎ林」や、作品集も好評な「おりがみアート講座」、まちぐるみで連携した「鳴く虫と郷町」、「友の会」の立ち上げ、最近では企画展「昆虫食」、「ごきぶり」などを担当しました。生物の専門家ではない学芸員という強み！？を活かし、昆虫学者にはない博物館屋の視点でワイワイと昆虫館を盛り上げたいと思っています。昆虫文化や昆虫食などに興味があり、最近の得意料理は「はちの子ご飯」です。

【スタッフ図鑑】

生きた昆虫たち。しかしもうひとつ、２０年間昆虫館の活動を支えてきです。私たちの生態を、図鑑風?に紹介いたします。

笑顔でがんばってます

主任学芸員（主任）
野本 康太（のもとこうた）

【原産地】埼玉県朝霞市
【好物】タバスコ、モズのはやにえ、木の実各種
【天敵】ゴキブリ、ヤマビル【主な担当】陸水生昆虫の生態展示
【最終学歴】千葉大学大学院自然科学研究科修了
【専門分野】植物生態学

虫捕りや魚釣りが大好きだった子どもの頃は、水槽の中で動く虫や魚たちをいつまでも眺めていました。自然のことをもっと知りたいと入った大学ですが、後に昆虫の研究室がないことに気づき、少しでも野外へ出られる生態学研究室にて植物について学びました。そして 10 年前昆虫館で働くことが決まり伊丹へやってきました。館では企画展「どんぐり」や「はやにえ」の展示、昆虫図鑑切手の制作などを担当してきました。大好きな自然観察会の仕事では、植物を見ていたつもりが昆虫を発見するというラッキーな場面が多々あります。植物と昆虫、生きもの同士のつながりという視点を大切にし、小さな命の存在や季節を感じることの楽しさを伝えていきたいなと思います。

主任学芸研究員（主任）
角正 美雪（かくまさみゆき）

【原産地】大阪府大阪市
【好物】フン虫、カエル、動物
【天敵】ヘビ、ミミズ、ムカデ
【主な担当】チョウ飼育
【最終学歴】帯広畜産大学大学院畜産学研究科修了
【専門分野】昆虫生態学

小さい頃は昆虫より小動物が大好きでした。家で犬やハムスター、カメ、九官鳥、金魚、オカメインコ、ウサギなどを飼っていたのです。野生動物と大自然への憧れで北海道の大学へ進み、第 2 希望の昆虫学研究室へ配属。湿原に生息する地上徘徊性甲虫のゴミムシを調査していました。北の大地で出会った野生動物やその環境についての考え方は、今でも生き物をあつかうこの仕事に役立っています。身近な昆虫との出会いや生き物との関わりをこどもたちやたくさんの人々に伝えていきたいです。企画展「むしのうんこ」から絵本になった「むしのうんこ」（柏書房）の出版に関わらせてもらってから、絵本をとおして虫の世界とこどもたちをつなぐ「虫の絵本のよみきかせ」がおもしろくなってきました。

学芸研究員
長島 聖大（ながしませいだい）

2008 年に発表したヒラタカメムシ科の新種

【原産地】兵庫県三木市
【好物】ラーメン（豚骨）
【天敵】ナメクジ
【主な担当】チョウ温室（植物）、標本管理
【最終学歴】岡山大学大学院自然科学研究科修了
【専門分野】昆虫学（特にカメムシ目の分類学）

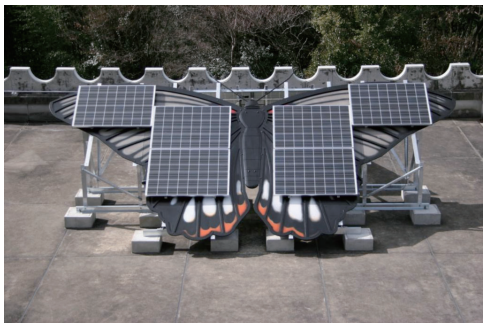
高校時代に地面が茶色に染まるほどのクサギカメムシの大発生を経験し、恐怖のあまり「大嫌いなカメムシを絶滅させる研究をしたい！」と東京農業大学農学部に進学しました。一年生の頃から入り浸った昆虫学研究室で、日々勉強を続けるうちにいつのまにか多様なカメムシの魅力にとりつかれてしまいました。今はヒラタカメムシ科というちょっと変わったグループを中心に、日本産全種を網羅する「カメムシ図鑑」の完成を夢見て日々虫を追い続けています。昆虫館ではチョウ温室の植物の管理が主な担当です。半年に一度ほど、休館日に行う大きなガジュマルの剪定は高所恐怖症の私には苦手な作業です。また、標本の作製や収蔵管理（いたこんニュース第 12 号参照）も大切な仕事のひとつです。

博物館で働く専門職員は「学芸員」と呼ばれ、資格もあります。伊丹市昆虫館では学芸スタッフ（学芸員）を中心に、解説員、受付、飼育、ショップ、庶務など、1 日あたり 10 人ほどのスタッフが力をあわせ運営しています。

さいきんの

太陽光パネルを背負った巨大ナガサキアゲハが出現

伊丹市昆虫館屋上に、温暖化とともに分布圏を北に広げつつあるナガサキアゲハ(♀)の巨大模型を設置し、計12枚の太陽光パネルを取り付けました。最大出力は2.2kwで、4月30日から発電を開始しました。4階の展望台から観望でき、32インチモニターでリアルタイムの発電量等を知ることができます。



ナガサキアゲハは1940年ごろまでは山口県や愛媛県が分布の北限でしたが、1980年代には大阪府で、1995年にはほぼ近畿地方全域で見ることができるようになり、分布を拡大しつつある昆虫の代表種とされています。昆陽池公園では1982年ごろから現れ始め、今では5月～9月にかけて普通に見られます。

変温動物のチョウははねが付いている胸の筋肉を太陽熱で温めてから飛びたちます。昆虫館のチョウ温室でも、太陽に背を向けて体を温めているチョウの様子が観察できます。

この太陽光パネル、架台及びモニターは、太陽光発電施設の普及・啓発を図ることを目的とした（財）ひょうご環境創造協会の助成をもとに設置されました。さらにこの屋上では、アオスジアゲハ型の緑化花壇をバタフライガーデンとして市民と共に整備し、その管理に使用する雨水貯水タンクとポンプも取り付けました。これらの展示を、近年の気候変動と身近な生き物との関わりや自然エネルギーの利用などについて人々が考えるきっかけとなるように、環境学習の教材としての活用を図ろうとしています。（後北峰之）

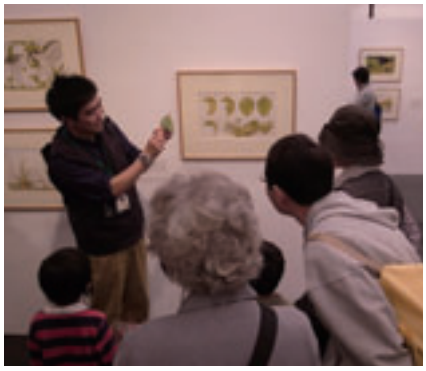
熊田千佳慕展で美術館とコラボ

伊丹市立美術館で去る4月10日から5月23日まで行われていた「熊田千佳慕展」。昆虫や植物などを精密に生き生きと描いた作品の展覧会ということで美術館から誘いを受け、伊丹市昆虫館が全面協力しました。

美術館で展示された昆虫の標本。昆虫館とはひと味ちがう会場に虫も緊張！？

作品のモチーフとなった昆虫たちの標本は、昆虫館から約40点ほどを持ち込みました。訪れた人たちも興味津々でした。

ギャラリートークも行いました。4回のトークは学芸スタッフが交代でおこない、絵の前で得意の昆虫の話をしました。各回定員を超える人気ぶりで、毎回違うスタッフの個性が発揮されたトークは大好評でした。落ち着いた美術館の雰囲気にスタッフも緊張しましたが、熱心なお客さまたちと時間を忘れて楽しいひとときを過ごしました。また、市内の7カ所をめぐるスタンプラリーにも参加しました。200名を超える方が全スタンプを達成したそうです。



美術館でのギャラリートーク風景。オトシブミの絵の前で、葉の巻き方の実演もしました

今回のコラボは、市内施設同士が親密だからこそ実現できた企画です。これからも連携して、おもしろい企画を実現してゆきたいと思っています。（坂本 昇、写真は伊丹市立美術館提供）

飼育室から

この虫の情報を募集中です！

2010年6月現在、生態展示室ではオオキンカメムシというカメムシの仲間を展示しています。オレンジの地に黒い水玉模様、おなか側は蛍光ピンク。初めてこの虫を見た方から「これ新種？」なんていう問い合わせもあります。実はこのカメムシ、「旅をする昆虫」として知られています。西日本では夏から秋にかけて、主に日本海側の山林で幼虫のエサであるアブラギリの実を吸って過ごし、冬場は和歌山や四国などの暖かい海沿いの常緑樹林で集団越冬すると考えられています。旅をするチョウ「アサギマダラ」の調査のように盛んではないですが、マーキング調査も行われています。しかし繁殖地や越冬地の情報を含め、旅の経路や距離など未解明で、まだまだ謎の多いカメムシなのです。この虫を見かけたらぜひ昆虫館にご一報下さい。（野本康太）

飛び立つ瞬間のオオキンカメムシ

アブラギリの実を吸う成虫

サカダチコノハムシの展示室デビュー

サカダチコノハムシは東南アジアに生息するコノハムシの一種で、美しい蛍光グリーンの体色と、体長15cmを超える巨体が特徴です。木から落ちた時などに後脚を上げ、まるで「逆立ち」のようなポースで敵を威嚇（いかく）する事から、この名前がつけられました。サカダチコノハムシは、昨夏の特別展「むしの忍者大集合」で展示したコノハムシやジンメンカメムシと同じく植物防疫法で輸入が禁止されている昆虫です。今回、農林水産大臣より昆虫館1階の生態展示室での展示許可を頂き、やっと生きたサカダチコノハムシの展示が可能になりました！1匹しかいないのでいつまで展示できるかはわかりませんが、貴重な機会なので、できるだけ多くの方に観察していただければ嬉しいです。（奥山清市）

これが噂の「逆立ち」ポーズ。けっこう威圧感があります。

コノハムシとツーショットで展示中です（2010年7月現在）

前号（第14号）における写真誤りのお詫びと訂正

「ほっとパーク昆陽池　昆陽池のバッタ」の記事内で誤りがありましたので、お詫びし訂正いたします。「トノサマバッタ」として掲載した写真は「クルマバッタ」の写真でした。

誤って掲載されたクルマバッタの写真

トノサマバッタ

読者の一人澤野洋樹氏から「クルマバッタではないか」とご指摘いただきました。写真では見分けのポイントとしてよく使われる、後ろばねの黒い紋や背中のふくらみがよく分からなかったため、日本直翅類学会の河合正人氏、市川顕彦氏に写真を見て頂きました。後脚腿節裏側に黒い帯がないこと、前胸背板の溝がハッキリ切れ込んでいないなどの点からクルマバッタと確認されました。

間違った写真を掲載してしまい、申し訳ございませんでした。今後はこのようなことがないよう、内容の確認に気を引き締めてかかります。ご迷惑をおかけしたみなさまには、謹んでお詫び申し上げます。本件でお世話になった澤野様、河合様、市川様には、改めてお礼申し上げます。（坂本昇）

8月は休まず開館＆時間延長します！

今年の8月も休まず毎日開館します（通常は火曜日休館）。また開館時間を1時間延長し、9:30 ～ 17:30 となります。これにともない昆陽池公園立体駐車場も期間中 18:00 までの営業となります。夕方まで昆虫館でゆっくりとお過ごし下さい。（角正美雪）

今年で開館 20 周年！

今年の 11 月 10 日で昆虫館は開館 20 年を迎えます。それを記念して「いたこん20周年大感謝祭」と題した特別展を開催します。昔懐かしの展示や昆虫館 20 年の年表などで今までを振り返りながら、未来の昆虫館をみなさんと一緒に考えていくことをテーマにしています。もちろん夏休み期間中は虫とのふれあいコーナーや体験型展示、イベントも盛りだくさんです。11 月 14 日には記念イベントを企画中しています。お楽しみに！（角正美雪）

もよおしあんない

8月
- 8（日）虫のおりがみワークショップ　予約制
- 21（土）昆虫標本の作り方講座　予約制
- 22（日）伊丹市昆虫館友の会出展

9月
- 18（土）チョウ温室ガイド

10月
- 9（土）ふれあい体験「むしさんこんにちは」
- 10（日）虫のおりがみワークショップ　予約制
- 16（土）どんぐりカーづくり
- 17（日）チョウ温室ガイド
- 24（日）こも巻き調査　予約制

11月
- 6（土）みんなで飾ろう！さなぎツリー
- 14（日）20 周年記念イベント
- 20（土）ふれあい体験「むしさんこんにちは」
- 27（土）みつろうキャンドルづくり　予約制
- 28（日）虫のおりがみワークショップ　予約制

12月
- 4（土）チョウのりんぷんてんしゃ

12/10 ～ 12/31　施設改修工事のため　休館させていただきます（予定）

特別展

7/14 ～ 11/15	20 周年記念特別展「いたこん 20 周年大感謝祭」
7/21 ～ 8/31	夏休み企画 虫のふれあいコーナー

企画展

9/ 4 ～ 11/15	どんぐり
11/17 ～ 1/24	ほっとパークこやいけ
1/26 ～ 4/ 4	くも

プチ展示

9/15 ～ 10/18	スズメバチ
11/ 6 ～ 12/ 9	さなぎツリー
1/ 1 ～ 1/14	いたこんでニューイヤー
1/ 1 ～ 2/ 7	カイコ
2/ 9 ～ 3/ 7	友の会活動紹介

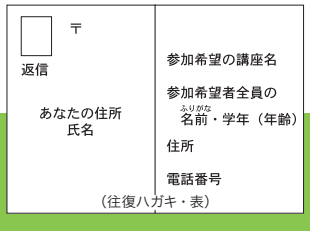
講習会・観察会の申込方法

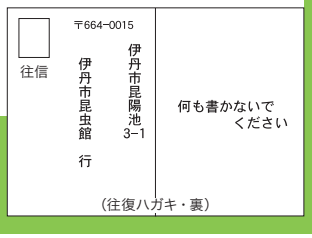
くわしい内容は…

- 伊丹市内に在住の方
  「広報伊丹」をごらんください。
  ＊広報伊丹へは実施日の約１ヶ月前に掲載します。
  電話での問い合わせには掲載以降に案内します。
  ＊広報伊丹は伊丹市ウェブサイトでご覧になれます。
- 伊丹市外に在住の方
  電話でお問い合わせください。
  ＊講習会・観察会実施日の約１ヶ月～２週間前までにお問い合わせください。

申し込むには…

- 往復ハガキ、ＦＡＸ、Ｅメール（携帯電話不可）で。行事の名前、参加する全ての方のＥメールアドレスなどを記入し、受付期間内にお送り下さい。
- 申込多数の場合は抽選になります。
- 往復ハガキの宛先住所
  〒664-0015　伊丹市昆陽池 3-1　伊丹市昆虫館
- ＦＡＸの宛先番号　072-785-2306
- Ｅメールアドレス　ge7n-skmt@asahi-net.or.jp





編集スタッフより

特集のスタッフ紹介は私たちには気恥ずかしいものでしたが、この記事が多くのみなさまに昆虫館に親しみを感じていただくきっかけになればうれしいです。（さかもと）

昆虫館は今年でなんと開館 20 周年。夏の特別展は 11 月 15 日までのロングランです。楽しいイベント、お得な特典盛りだくさん！　一度といわず何度でも遊びに来て下さい。（のもと）

表紙写真　太陽光発電パネルのナガサキアゲハと学芸スタッフ　撮影：大橋昭仁

次回（第 16 号）発行は、2011（平成 23）年 2 月頃の予定です。

いたこんニュース　第 15 号　Vol.8　No.1　（通巻 15 号）
2010（平成 22）年 7 月発行
発　　行　伊丹市昆虫館
〒 664-0015 伊丹市昆陽池 3-1　昆陽池公園内
TEL：072-785-3582　FAX：072-785-2306
URL：http://www.itakon.com/
E-mail：ge7n-skmt@asahi-net.or.jp
編　　集　坂本 昇・野本康太
デザイン原案　pico*pictures
印　　刷　兵田印刷工芸株式会社